

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つげられた

第172号

イザヤ 65:1

平成22年1月29日

「主が命じて仰せられたおしへの定めは、こうである。イスラエル人に言い、傷がなく、まだくびきの置かれたことのない、完全な赤い雌牛をあなたのところに引いて来させよ。あなたがたはそれを祭司エルアザルに渡せ。彼はそれを宿営の外に引き出し、彼の前でほふれ。祭司エルアザルは指でその血を取り、会見の天幕の正面に向かってこの血を七たび振りかけよ。その雌牛は彼の目の前で焼け。その皮、肉、血をその汚物とともに焼かなければならない。祭司は、杉の木と、ヒソブと、緋色の糸を取り、それを雌牛の焼けている中に投げ入れる。祭司は、その衣服を洗い、そのからだに水を浴びよ。その後、宿営に入ることができる。しかし、その祭司は夕方まで汚れる。それを焼いた者も、その衣服を水で洗い、からだに水を浴びなければならぬ。しかし彼も夕方まで汚れる。身にきよい人がその雌牛の灰を集め、宿営の外にきよい所に置き、イスラエル人の会衆のため、汚れをきよめる水を作るために、それを保存しておく。これは罪のきよめのためである。この雌牛の灰を集めた者も、その衣服を洗う。彼は夕方まで汚れる。これは、イスラエル人にも、あなたがたの間の在留異国人にも永遠のおきてとなる。民数記19:2-10

西暦三十二年、美しいエルサレム神殿が突然滅びる日のことを預言されたキリストに人々は、世の終わりがいつ来るのかと尋ねました。それに答えてキリストは「戦争や暴動のことを聞いても、こわがってはいけません。それは、初めに必ず起こることです。だが、終わりは、すぐには来ません……日と月と星には、前兆が現れ、地上では、諸国の民が、海と波が荒れどよめくために不安に陥って悩み、人々は、その住むすべてのところを襲おうとしていることを予想して、恐ろしさのあまり気を失います。天の万象が揺り動かされるからです。そのとき、人々は、人の子が力と輝かしい栄光を帯びて雲に乗って来るのを見るのです。これらのことが起こり始めたなら、からだをまっすぐにし、頭を上になげなさい。驢が近づいたのです……いちじくの木や、すべての木を見なさい。木の芽が出ると、それを見て夏の近いことがわかります。そのように、これらのことが起こるのを見たら、神の国は近いと知りなさい。まことに、あなたに告げます。すべてのことが起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません……あなたがたの心が、放蕩や深酒やこの世の煩いのために沈み込んでいるところに、その日がわなのように、突然あなたがたに臨むことのないように、よく気をつけていなさい」(ルカ21:9-34)と、自然界に起こる現象を通して「とき」を知るようにと、いちじくと回りの木々のたとえに言及されました。「いちじくの芽吹き」に象徴される1948年のイスラエル国家復興からすでに六十一年を経た今日、神が送られるしるしを見過ごすことがないように、メシヤの王国の首都になるエルサレムに目を留めていることは大切です。

今年は年頭から、北半球を襲った世界的な寒波と洪水、ハイチ大地震で全地は大きく揺り動かされました。中東では、イスラエルとイランなど近隣諸国との関係がますます悪化し、核兵器使用による戦闘の可能性やシリアの首都ダマスコが廃墟となるというイザヤの預言が今年成就するのではないかとまことしやかにうわさされたりしています。終末の末期の特長としてよく言及されるのは、全世界の政治、経済、宗教、社会を一つの世界政府の下に置く反キリストの登場です。黙示録6章には、封印が解かれて、全地に色の違った馬が出て行くたびにこれら四つの領域が悪しき者の手によってすべて支配されていくことが描かれているようですが、第五の封印は、そのためにキリストに従う者たちの多くが迫害され、殺されることを語っています。しかし、最後には神に反逆するこの世界政府は「神のことば」と呼ばれるキリストによって滅ぼされ、人間が支配する王国の時代は幕を閉じ、メシヤの王国に取って変えられることとなります。

「すべてのことが起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません」とキリストが言われた「時代」を一世代とみなし、「私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年」と詩篇90篇でモーセが言及した年齢を一世代の年数とみなすなら、キリストの再臨によって地上に樹立される「神の国」の到来は非常に近いということになります。イスラエルでは、前世紀末から今世紀にかけてメシヤの時代到来にかけの思いが日に日に増しているようです。ラビたちはヘブル語(旧約)聖書の研究から、人間の王国が六千年続いた後七千年目はメシヤの時代になると信じてきましたが、アダム生誕を紀元前4004年とすれば今世紀はもういつメシヤの支配が始まってよい時期に入っていることとなります。ユダヤ人たちは二十世紀末から、エゼキエルが啓示を通して描いた「メシヤの神殿」で用いられることになる純金製の燭台、パンの机、香壇などの神殿用具、祭具の準備を着々と進め、現時点では、そのほとんどが完成しているといえます。祭司の系図に連なる者たちのDNA鑑定による同定もすでに行われて神殿奉仕に携わる人たちの数もそろっており、神殿といけにえをささげる祭壇が建設されればいつでも旧約の祭司制度を復興させることができるところまで備えはできているのです。

祭司の装束の亜麻布のための糸はインドで紡がれ、テルアビブで六糸の撚り糸で織られ、染色のためには、2008年7月、深紅の染料に必要とされる貴重な「緋の虫」がイスラエルのサマリヤ地区で採集され、現在、白、紫、深紅、青を基調とした120人分の装束（白い「市松模様の長服」、「青服」、そでのない装束「エポデ」、「飾り帯」「かぶり物」）がすでに各自の身丈に合わせて整えられているといえます。イスラエルの地で「緋の虫」採集が行われたのはほぼ二千年ぶりのことで、この歴史的なイベントは、染料獲得の他にイスラエルの新しい世代に「緋の虫」の採集法とモーセの掟に従った深紅染料の製造法を教える教育的な目的もあったようです。この染料は、祭司の装束のためだけでなく、イスラエルの例祭の一つ「贖罪の日」に、罪を背負わせて荒野に放ち、イスラエルから悪の源を取り除く目的を担う「アザゼルと呼ばれるやぎ」に結びつける「赤いひも」のための染料、また、「赤い雌牛」の灰と混ぜて「きよめの水」を作るために欠かせない「緋色の糸」のための染料として重要な役割を担うのです。「緋の虫」には血を象徴する深紅だけでなく、母虫の体を犠牲にして幼虫に生命を与えるというその生態に、「木の上の虫」として死んでくださったキリストの受難が象徴されており、神の人類救済の御計画、手段が、被造物に反映されているのを見ることのできる一例です（詳細は[フルダレター 162号](#)）。

祭司制復興のために不可欠な要素は、冒頭に引用した民数記に記されている「赤い雌牛の灰」です。神殿、祭司、祭壇、洗盤が備えられてもそれらの聖めがされなければ、機能を果たすことができないのです。1997年3月16日にイスラエルのハイファ市のクファル・ハシディムで濃赤色の雌牛が生まれ、「神がついに赤い雌牛を与えてくださった！」とユダヤ人を歓喜させました。イスラエルの白黒の母牛にスイスの雄牛との掛け合わせで人工的に生まれたこの子牛メロディは、西暦七十年にヘロデの神殿がローマ軍によって破壊されて以来初めてイスラエルに生まれた赤い雌牛で、メシヤの時代の神殿建設の「とき」が来たこととしとして受け止められたのです。しかし成長とともに完全ではないこと、すなわち、尾の部分に発見された数本の白い毛とまつ毛が赤から黒色に変わったことから、ラビたちは「コーシャ（適正）ではない」と判定したのです。その後、2002年4月8日にも赤い雌牛が生まれ大きな期待が寄せられたのですが、この牛も六ヶ月後に失格と判定されたのです。しかし、科学者たちによって、赤い雌牛の遺伝暗号が明らかになり、人工的に生みだされた動物を果たして神が受け入れられるかどうかは別問題として、すでにクローン技術によって生産されたのか、あるいは、まだ生まれていなくても、いつでも備えることができる状態にあるようです。

旧約の「雌牛の灰による聖めの儀式」は、祭司、いけにえを焼く人、灰を集める人が「聖めの儀式」に関わったために汚れるという不思議な儀式で、ラビたちの表現を借りれば、あたかも「汚れたものを聖め、聖いものを汚す」儀式でした。「聖めの水」で聖められる必要がここでは特に「人の死との接触による汚れ」に絞られており、それは聖書が語る「罪は死の原因で、死は罪の結果である」ことを解決するための儀式、つまり、「罪」を取り扱う儀式でした。この儀式には、罪の深刻さ、罪からの解放の必要、唯一の救いの道は神の憐れみ、聖めに要求される犠牲の大きさ、未来の人々の聖めも意図、などが語られており、明らかに、キリストの血による罪の赦しと聖めを象徴するものでした。レビ記の掟では、女の「人身評価」は30シェケルでしたが、キリストは「銀貨三十枚」＝銀30シェケルで売られ「罪人」として十字架刑につけられたのです。また、一回の犠牲が現在だけでなく未来の聖めにも有効、宿営の外でほふられ、聖い方が身代わりとなることにより、罪ある汚れた者が聖いとみなされることになるなど、すべてにおいて、キリストはこの儀式を成就されたのです。

イスラエルでは、昨年秋からヨルダン川西岸のエリコの近くでいけにえのための祭壇建設が始まり、今年年頭には、「ニサン月の十四日の過越」で始まる「種なしパンの祭り」（今年3月29日の夕暮れから4月5/6日）に、過越の子羊をほふる古代イスラエルの儀式を復興させるとの声明がなされました。全世界のユダヤ人はじめ、儀式に賛同する者に、一人当たり7シェケル（NIS）≒210円相当の「過越のコルバン」を支払い、会員として登録するようにとの呼びかけが「新生サンヒドリン」から出されることになっています。イスラエル人の間で二千年近くも中止になっていた祭司制度復興にはクローン技術をはじめ最新工学の貢献を見逃すことはできません。

「あなたが石の祭壇を私のために造るなら、切り石でそれを築いてはならない。あなたが石に、のみを当てるなら、それを汚すことになる」というモーセの掟に従って、祭壇のためにはヨルダン川の底から集められた天然石が用いられ、人の手を当てるのみや刃物ではなくレーザー光線で石を切断する手法が取られるようです。本来の神殿が建てられるべきエルサレムの神殿の丘には隣接地にイスラム教のモスクが立っているため建設工事に取り掛かることができない点に関しては、ちょうどダビデが、神殿がソロモンの手によって完成するまで仮の「ダビデの幕屋」に神殿用具、祭具を置いて礼拝したのにならって、仮の場所での儀式復興に踏み切るわけです。しかしこの動きには回りから大きな妨害が入ることが予測されています。イスラエルは、2007年1月1日に、2013年12月31日までの七年間のヨーロッパ近隣政策（ENP）に調印したのですが、動物犠牲をささげることはこの政策の禁止事項で、同盟国からの制裁が加わることは間違いないといわれています。その加え方次第ではダニエルの「七十週の預言」の最後の週の真ん中で起こるとされている「いけにえとささげ物とをやめさせる。荒らす忌むべき者が翼に現れる」が成就することになるのではないかと危ぶむ声が高くなっています。